

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりでみる日本の近代化—(5) — 世界史的視点から —

松 原 正 道^{*}

はじめに

前稿では、ザビエルを鄭重に迎えた豊後の大友家。当主、義鎮（宗麟）のキリシタンになる大きな動機づけとなったのだが、家内の事情で彼の入信は20年の後になるのだった。

そして、日本のキリシタンに多大な影響を与えた織田信長、彼が今川義元と雌雄を決する事になる「桶狭間の戦い」に至る迄の織田、今川両家の成り立ちについて触れた。

本稿では、大友義鎮と大友家の成り立ち、「桶狭間の戦い」に至る迄の信長について考察を進めて行きたいと考えている。

I. 大友家の系譜

大友家は祖能直（生没年不詳）が、相模國足柄郡大友荘を領する源頼朝の御家人だったが、養父の鎮西奉行中原親能（康治2〈1143〉—承元2〈1208〉）から豊後国大野荘の地頭職を譲られた事で、豊後に勢力を持つようになったと言われている。

二代親秀（生没年不詳）が豊後の守護に補任され、三代頼泰（生没年不詳）は文永年間、豊後高國府を守護所と定めて下向。蒙古襲来の際、豊後守護・鎮西談義所奉行として少弐経資（嘉禄2〈1226〉—正応2〈89〉）と共に戦功をあげ、この頃迄に詫磨・元吉・一万田・鷹尾・志賀・田原、戸次、狭間、木付等の庶家を分出、豊後を中心に肥後、筑後に定着。

4代親時（生没年不詳）の三男で5代貞宗（?—延元・建武3〈1336〉）は南北朝内乱期足利氏に属し、元弘3・正慶2（1333）年、護良親王の令旨に従い菊池武時（?—元弘3・正慶2〈1333〉）が九州（鎮西）探題赤橋英時（?—元弘3・正慶2〈1333〉）に対し挙兵するが、時期尚早として少弐貞経（文永9〈1272〉—延元1・建武3〈1336〉）等と共に、英時に加担し武時を敗死させるのだが、各地に反幕府勢力が台頭し、六波羅探題が陥落するや彼も少弐氏、島津貞久（文永6〈1269〉—正平21・貞治5〈1366〉）と共に出兵、博多の英

^{*}淑徳大学名誉教授

時の館を襲い自決させるのだった。

貞宗は、足利高氏に鎮西での戦いを報告、捕虜等の取り扱いを任され、8月には、戦功を賞する後醍醐天皇の綸旨を受け、上洛して活躍しようとするが病を得て、同年12月京都南禅寺で没する。

兄貞親（生没年不詳）が禅宗に帰依していたため、貞宗も日常酒肉を嗜まず、豊後国宝戒寺等を創建、宋朝風禅宗に帰依。顕孝寺は入宋した禅僧の寄寓寺として、貞宗も彼らと交わり中国から僧を招く等、禅宗を媒介にして中国文化摂取に多大な貢献をするのである。

貞宗の七男氏時（生没年不詳）が、兄氏泰（生没年不詳）の遁世により貞和4（1348）年家督を継ぐが、氏泰の時代、大友家は建武政権から豊後、肥後の守護に補任される。

建武2（1335）年、足利尊氏が叛くと、貞戴（？－延元1・建武3〈1336〉）は氏泰の名代として従い、長子貞順（生没年不詳）は南朝方につくが、大友宗家は一貫して北朝に与みし、南北朝両軍の戦略の焦点となる。当時の九州は、九州管領一色範氏（道猷 生没年不詳）、足利直冬（嘉暦2〈1327〉？－応永7〈1400〉）、征西将軍宮の三勢力が鼎立。在地の勢力は離合集散を繰り返し、氏時も観応2・正平6（1351）年、征西将軍宮と一色範氏の連合が成立するとこれに加担、直冬と戦うのである。

しかし、直冬の九州脱出後、氏時は延文3（1358）年、高崎城に拠り征西将軍宮に反旗を翻し、以後、一色頼久（生没年不詳）と共に武家方の中心勢力として、菊池氏等と一進一退の攻防を繰り返すのである。だが、筑後大保原の戦いで敗れ、貞治2（1363）年、菊池武光（？－文中1・応安2〈1372〉）に攻められ高崎城は落城し、自らも負傷、翌年家督を嫡子氏継（生没年不詳）に譲るのである。

以後、大友氏は、氏継流と親世流とに分かれ、両派交代で氏継・親世（？－応永25〈1418〉）・親著（生没年不詳）・持直（生没年不詳）・親綱（生没年不詳）・親隆（生没年不詳）・親繁（生没年不詳）と家督を継ぐが、中国地方からの大内氏の侵出、幕府の介入もあって一族内の関係は複雑となるのだった。

文明8（1476）年、親繁は、両派交代の慣例を破り長子政親（生没年不詳）に家督を譲るのだが、政親と子の義右（生没年不詳）が不和となり、これに大内義興の策謀が絡み大友家中の内乱に発展するのである。その最中、父子共に死に大友氏は大打撃を受けるのだが、家督は政親の弟親治（生没年不詳）が継ぎ、子義長（生没年不詳）と共に内紛を鎮め、嫡子単独相続制を確立し、戦国大名としての基礎を固めるのである。

義長の子で共に将軍足利義晴（永正8〈1511〉天文19〈50〉）の一字をもらった義鑑（文亀2〈1502〉－天文19〈50〉）は、修理大夫に任ぜられるや次第に勢力を伸ばし、豊前、豊後、筑後、肥後の4ヶ国を領有、「沖の浜」を拠点に鉄砲等海外の文物入手のため南蛮船との交易に力を入れるのである。

第10代親世の「春日丸」をはじめとする大名船を保有し、瀬戸内海や東シナ海、さらには東南アジアの南のシナ海へと木造船を就航させ、外交や貿易活動を展開しています。

鹿毛敏夫『大航海時代のアジアと大友宗麟』
海鳥社 2013 50頁

と言われるのだが、そのため、博多を対外（明・朝鮮）貿易の拠点とする大内義隆（永正4〈1507〉－天文20〈51〉）と北九州の覇権を巡って度々争いを繰り返すのだった。天文8（1537）年、將軍足利義晴の仲介で両者は和議を結ぶ。

領内には中国のジャンク船がよく来航した。（中略）義鎮が16歳の時7、8人のポルトガル人が中国のジャンク船に便乗してきたことがある。その中にとりわけ金持ちで勢力のあったジョルジ・デ・フェリアという商人があったが、中国人の水先案内の男が義鑑にそっと申し出て、その商人を殺して欲しい。そうすればその商人の持ってきた商品を全部引き渡そうと持ちかけた。吉鑑は欲にかられてその話に乗ろうとしたが、このことを知った義鎮はすぐ父の元に駆けつけて、遠い土地からわざわざこの豊後迄来て交易を行なおうという外国人を保護するどころか殺すなどとは道理にはずれている。そのような非道なこととはすべきではないと父をいさめたということである。

岡田章雄『キリシタン大名』
教育社 1985年 40頁

だが、義鑑は、自らの幼名と同じ嫡子の塩法師丸（義鎮）を疎んじ、側室の子塩市丸を寵愛、家督を譲ろうとしたため、天文19（1550）年、塩法師丸を擁立する家臣団の反乱を招き、彼自身、重傷を負って没するのだった。（二階〈櫓〉崩しの乱）

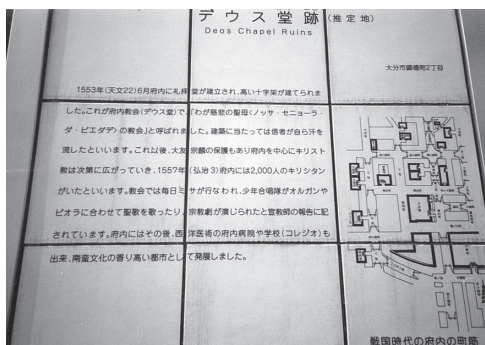
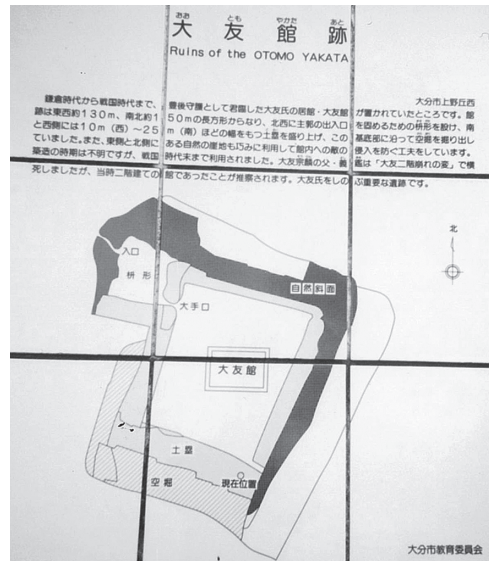
父の死で豊後、筑後、肥後、肥前、豊前の5ヶ国の太守となり、父同様將軍の名を受けた大友義鎮（享禄3〈1530〉－天正15〈87〉）ではあったが、22歳でザビエルを豊後（大分）に招きながらも、家内の事情で永禄5（1562）年には出家し休庵宗麟と号し、入信は20年後の事になるのだった。

だが、義鎮が長崎の大村純忠、有馬の有馬晴信と共に派遣した「天正遣欧少年使節団」は、日本キリシタン史のみならず、世界史上でも特筆される出来事だと言えるのである。

コロンブス（1451？－1506）がマルコ・ポーロ（1254－1324）の『世界の記述』にある



大友館跡（大分市）

デウス堂跡（推定地）および戦国時代の
府内の町筋（同）

大友館跡（図）

アジアの「富」を手に入れる事とキリスト教の布教を目的に、当時の最新の知識「地球球体説」に従い「西航」して新大陸を「発見」したように、キリスト教世界ではその布教は「使命」だったのである。

特に、ルターが提唱した「宗教改革」により生まれたプロテスタントとの闘ぎ合いの中での「反宗教改革運動」は歴代教皇にとって至上命題となるのだった。

それにより世界に広まったキリスト教ではあるが、インドや東南アジアでは布教の成果が上がらないとザビエル自身が嘆く中、地方豪族（王）達とは言うものの、アジアの外れの日本から正式な使者をキリスト教の本山ヴァチカンに送ると言う事は世界史上の一大事であって、ローマ教皇にとって、倅倅とも言うべき事柄だったのである。

メディチ家で教育を受け、ミケランジェロ Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni (1475-1564) に『最後の審判』を描かせたパウルス Paulus 3 世 (1468-1549 在位1534-) は、教皇に就任すると時代の要請に応え優秀な人材を枢機卿として登用、教会（カトリック）の改革に当たるのだった。

世界にキリスト教（カトリック）を広める事を命題として、ザビエルも参加し、彼が、師父と仰ぐロヨラ Ignatius de Loyola (1491-1556) による「イエズス会」の創設もそうした風潮の中に生まれたもので、その点で、「天正遣欧少年使節団」の来訪はカトリック世界においては彼らの活動の成果を示すものだったわけである。

従って、「少年使節団」は至る所で歓迎され、スペイン（イスパニア）国王フェリペ Felipe 2 世 (1527-98 在位1556-)、教皇グレゴリウス Gregorius 13 世 (1502-85 在位1572-) に謁見。教皇からは「黄金の拍車の騎士」の称号を得、ローマ市では「ローマ市民権」を得るのだった。「天正遣欧少年使節団」については、後に触れる。

Ⅱ. 織田家と今川家の確執

「桶狭間」で対峙する織田信長（天文3〈1534〉-天正10〈82〉）、今川義元（永正16〈1519〉-永禄3〈60〉）の両雄。父信秀（永正7〈1510〉-天文18〈49〉）が那古屋城を攻略、信長の生誕地の勝幡から本拠を移し勢力を振うようになった織田家。三河の松平家を挟んで遠州、駿河を支配する今川家。そのため、両家の小競り合いはそれぞれの膨張策のため度々あり、異説もあるが西上を考えた義元には、その道筋にある尾張、美濃に力を張り出してきた織田家は無視できない存在だったのである。

信秀の攻撃を受けた松平広忠（大永6〈1526〉-天文18〈49〉）は、義元の援助を得るため6歳の竹千代（元康・徳川家康）を今川家の居城駿府に送るが、途中、信秀の手の者に奪われてしまう。そのため、竹千代は8歳年長の信長とも幼少時に交わるのだった。

「桶狭間の戦い」の前哨戦とも言える織田、今川の争いに「村木砦の戦い」がある。義元は、岡崎の広忠を支援、尾張の新興勢力織田氏と対立をする事になるのだが、こうした中、広忠が家臣によって殺されると、義元は好機とばかりに岡崎城に兵を入れこれを占領、領内の年貢も今川家に取り立てると言うように松平家の領地を支配下に収めるのである。

更に、義元は大軍を差し向けて、織田氏が守っていた安祥城を攻略、城主織田信広（信長の庶兄）を生け捕りにして、その頃、熱田で織田家に捕われていた竹千代と交換したため、以後、竹千代は今川家の人質となるのだった。

竹千代の母於大の方（享禄1〈1528〉-慶長7〈1602〉）が水野忠政（明応2〈1493〉-天文11〈1543〉）の娘だったと言う水野家は、

水野氏は、15世紀中頃より尾張緒川・三河刈谷あたりに領地を広げ、
応仁の乱による地方の混乱に乗じて勢力を伸ばした地方豪族である。

谷口克広『天下人の父・織田信秀—信長は何を学び、
受け継いだか』祥伝社新書 2017 104頁

と言われる様に、ほぼ同格の松平家とは近隣の豪族同士、互いに姻戚関係を結んでいたのである。だが、その一方で、水野家は織田家に対して、

信秀も含めて織田氏とは反目していた。那古屋城を占領した信秀がさらに東方をうかがおうとした時、水野氏の存在が障害になったに違いない。

同上書 105頁

と言われる如く、両家是对立関係にあったが、忠政が死に、嫡男信元が跡を継ぐと、彼は、

当時の信秀の勢いを見て、路線の転換を決意。信秀と協力することにした。松平弘忠のもとに嫁いでいた信元の妹於大が離別され乳飲み子の竹千代を残して実家に送り返されたのは、この時のことである。

同上書 105頁

と言うように、この時から織田・水野両家は同盟関係に入り、信長も信元（? - 天正3〈1575〉）との関係を大切にするのだった。そのため、3歳で母於大と別れた竹千代は父を失った後も今川家に残る事になり、戦に際し先鋒を務める事にもなるのである。

安祥城の陥落後、海上においても、衣ヶ浦の大浜港は今川軍の支配下に入ったと言われるように、今川軍の侵攻が進む中、織田家では、父信秀が天文20年に病死すると18歳の信長が後を継ぐ事になるのである。

ところが、信秀の死は、長年の恩顧にも関わらず鳴海城主山口左馬助・九郎次郎（共に生没年不詳）父子が織田氏に背いて今川方に与みし、その上、山口の誘いにより大高城、沓掛城も今川軍に降ると言った織田家内の裏切りをもたらすのである。その上、信秀の遺臣の中には、例えば、柴田勝家（大永2〈1522〉 - 天正11〈83〉）等は、末森城にいた信長の弟信行（? - 永禄1〈1558〉）を跡継ぎに立てようとの動きを示すのだった。

そして、信秀の時代以来の、一族ではあるが、清洲城の織田氏、岩倉城の織田氏との対立が依然として続いていると言うように、家督を継ぎ那古屋（名古屋）城にいた信長の立場は内外共に極めて不安定だったのである。

信長の同母弟信勝の家臣柴田権六勝家は、信勝を家督につけるため信長の宿老林秀貞らを誘って挙兵、弘治2年8月両軍は稲生で衝突した。が、柴田軍は破れた。母親のとりなしで信長は信勝・勝家らを赦

免したが、信勝は信長の直轄領篠木三郷を押領しようとするなど、なおも信長に対抗した。このため信長は信勝の暗殺を企み、仮病を装ってひきこもり、見舞に訪れた信勝を討ち取った。永禄元年のこととされる。

池上悠子『織田信長』吉川弘文館
2004年 14頁

こうした織田家の内部事情に乗じて、今川軍は尾張への攻勢を強め、天文21年、岡崎に根拠地を置き、そこから兵を進めて刈谷の東、重（鳴）原の城を占領し、そこを根城に、信長と手を結んだ水野信元の緒（小）川城を次の攻撃目標とするのだった。

当時、猿渡川は、重（鳴）原迄入江になっており、今川勢は、この港を物資の集積所として、資材、兵員を村木岬に陸揚げし、天文22（1554）年には村木砦を築き、織田家に味方する緒（小）川城の信元を攻略するために着々と準備を進めるのだった。

それにしても、水野の居城刈谷、緒川間の海を通過して村木砦を構築する敵を黙視していた水野軍の何と非力なことよ、前に大浜港が今川軍の支配したに入ったと述べたが、衣が浦の制海権は完全に今川軍に抑えられていたのであろうか。

梶川武『改訂 東浦町歴史散歩』愛知県
知多郡東浦町教育委員会 2012年 32頁

と言う批判がなされるのである。

信元からの注進を受けた信長は、一族ではあるが彼に敵意を持つ清洲からの攻撃に備えて、那古屋城留守部隊を舅であり、「蝮」の異名を持つ美濃の齊藤道三に頼むのだった。「見聞した状況を毎日報告せよ」と送り出された援軍の美濃勢1千人の到着を待って、天文23年1月22日、信長は水野氏の救援に出発するのである。

今川軍が緒川城を攻撃した時も、決死の覚悟で駆けつけ、付城の村木砦を攻略して信元の危機を救っている。

谷口 前掲書 105頁

当時の信長としては、水野家の存亡は自らにとっても死活問題だったのである。陸路は既に今川方に押さえられていたため織田軍は海路を取る事になるのだが、22日は予想外の大風

だった。「御渡海はできません」と船頭・舵取り達は言うのだが、信長は、

「昔、渡辺・福島で源義経と梶原景時が、退却に備えて逆方向に漕ぐ逆櫓をつけるか否かで争っている時の風も、このくらいだったろう。是非とも渡海するから船を出せ」

太田牛一著 中川太吉訳『現代語訳 信長公記』
KADOKAWA 新人物文庫 2014 57頁

と言って、強引に船を出させ、

20里ほどのところを、ただの半時ばかりで押し渡り着岸した。

同上書57頁

と言われるように、知多半島西岸に上陸するのだった（上陸地については所説あり）。

織田・水野連合軍が村木砦の攻撃を開始したのは24日の朝からだった。海岸からは水野軍、南方から信長軍、西の搦め手は伯父の織田孫三郎が攻めた。この時、信長は当時の新兵器である鉄砲を持参し、弾を家来に籠めさせて取替え取替え南の大堀から撃ったという。（種子島へ鉄砲が伝来したのは天文12年）両軍激戦の後、午後4時頃になって城中から降参の申し出があって戦は終わった。よく25日信長は那古屋城へ帰還した。

梶川 前掲書32頁

と言うように直ちに帰城するのだった。この戦の報告を聞いた舅の斉藤道三は、

「すさまじき男。隣にはいやなる人に候よ」

同上書32頁

と言ったと言うのである。出陣から帰城まで僅か4日の行動だった。この時、信長、21歳だった。



村木砦址（愛知県知多郡東浦町）



村木神社（信長軍集結地・同）



緒川城址（家康の生母於大の方生誕地・同）

祖父松平清康の時代には三河国の国侍を支配していたほどの勢いであったが、祖父の清康も父広忠も二代相續いて家臣に殺されるという悲運に会い、松平一族は衰退のどん底に陥り、三河は今川氏の領国に等しい有様となってしまった。

梶川 前掲書 33頁

と言われる様に、水野家と並び称される松平家ではあったが、内紛の故に、台頭する弾正忠織田家と今川家との狭間にあって、

三河は今川氏の領国に等しい有様となってしまった。彼は人質でありながらも、14歳で元服し、16歳の時今川義元の姪を妻に迎え、松平元康と名乗るのだった。

同上書 33頁

元康は、17歳の永禄元（1558）年、義元の指図によって旧領回復の目的の戦で初陣を果たしたのを始め、同年6月からの、伯父である水野信元と対峙する「石ヶ瀬の戦い」を3回繰り返すのである。この間、「桶狭間の戦い」（永禄3年）に際しては、今川軍の先鋒を勤めるのだった。

まとめ

豊後（府中）に招かれたザビエルだが、滞在僅か3ヶ月でゴアへの旅に着くのである。日本での布教も緒に就いたばかりだと言うのに、何が彼をして離日を促したのか。

その後の言動から、中国の布教が新たな関心事となったと言えるのだが、当時の彼にとって、中国布教はそれほど重要だったのだろうか。

彼の一ヶ所に止まらない性格を感じるのは穿った見方だろうか。彼は、それぞれの地で布教の播種者の役割を果たそうとしたのだろうか。「近代化日本」をテーマとする考察であるので、ザビエルの心理を探るのが目的ではないが、こうした疑問が残るのである。

参考文献

- 小和田哲男『戦国武将』中公新書 1981.
岡田章雄『キリシタン大名』教育社 1985.
鹿毛敏夫『大航海時代のアジアと大友宗麟』海鳥社 2013.
玉水光洋・坂本嘉弘『大友宗麟の戦国都市』豊後府内 新泉社 2013.
池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2016.
梶浦武『改訂 東浦歴史散歩』愛知県知多郡東浦教育委員会 2012.
東浦町教育委員会『戦国時代絵巻 徳川家康の母於大の方と水野氏』愛知県知多郡東浦町 2015.
太田牛一著 中川太古訳『現代語訳信長公記』新人物文庫 2014.
武田知弘『「桶狭間」は経済戦争だった』戦国史の謎は「経済」で解ける 青春出版社 2014.
谷口克広『天下人の父・織田信秀』祥伝社新書 2017.

Research Notes

The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
From the Viewpoint of World History

MATSUBARA, Masamichi

In this essay, at I, I attend study about Ohtomo family in Bungo Hunai. The family has 20 generations until Ohtomo Shigenobu who invites Fransisco Zavier to Bungo Hunai. At part II I looked in the conflict between Oda Nobunaga and Imagawa Yosimoto. Especially, 'the battle of Muraki casle'